鈴木　千琴　氏の学位審査結果の要旨

主査：上野　昌江
副査：近藤　麻理、三木　明子

幼児期の子どもの排泄の自立は、子どもが自律性を獲得していくための重要な発達課題である。本研究は、排泄の自立に向けた幼児が学ぶプロセスと養育者のかかわり・態度の変化の様相を記述し、排泄の自立期に生じやすい養育者と子どもとの間で生じる課題に対して必要な看護介入を実施、評価している。本研究は、幼児が排泄の自立に向けて学ぶ力を育む看護介入プログラムを開発することを目的とした、独創性が高く学術的に評価できる実践的研究である。研究方法は事例研究であり、研究枠組みを子どもの排泄への発達的移行とし、22 組の母子へ縦断的に半構成的面接によりデータ収集を行い、幼児の排泄の自立に向けた学びのプロセスおよび養育者の関りを抽出している。さらに子どもの学びのプロセスにおいて、母子の間にずれがある 4 事例および排泄の課題がある 4 事例の計 8 事例に発達的移行が順調に進むための予防的看護介入を実施し、評価している。結果は、子どもの排泄の移行の学びのプロセスとして 3 カテゴリー【共有される世界で自己の身体を知る】、【繰り返す中で自分のコツを掴む】、【生活の中でタイミングをとらえる】を導き出し、子どもの学びの転換ポイントとして「出すがわかる」、「身体の中で溜まった感じがわかる」の２つを示している。カテゴリーに応じた養育者のケアのあり様として【子どもに近づき世界を共有する】、【子どもに任せながら程よいタイミングで手を差し伸べる】、【子どもの自己調整に合わせる】を示し、養育者が判断する重要な変化として「用具を紹介する」、「パンツの選択肢を導入する」、「オムツとのつながりを断つ」の３つを示している。看護介入が必要と見極め、「母子の間のずれ」に働きかけた 4 事例に対しては、5~7 か月間にわたる支援を 4 回から５回行い、母親が捉えている子どもの言動の言語化を促し、子どもの現状や母親のケア不足に気づくように支援していた。「排泄の課題」があった 4 事例へは 3 か月から 12 か月の長期にわたる支援を 3 回から 5 回行い、母親が子どもの排便のパターンを捉え、子どもと排便前後の感覚を共有できるよう支援していた。これらの看護介入から排泄の自立に向かう幼児の学ぶ力を育む看護介入プログラムを提示している。本研究から導き出された介入プログラムは、スクリーニングの指標、アセスメント、個別支援からなり、幼児の排泄の発達的移行に関与する方略として期待できる。これらの支援の積み重ねにより看護実践を革新するためのさらなる開発に貢献できると考える。

以上のことから本研究は博士論文としての価値を有し、博士（看護学）の学位の授与に値するものと判断した。